

発掘調査の概要

藤原宮大極殿院東北隅部の調査(飛鳥藤原第195次)

2017年10月から開始した藤原宮大極殿院東北隅部の調査は、奈文研ニュースNo.68において調査前半部の報告をおこないました。今回はその後あきらかになった調査後半での成果を報告します。調査は、2018年3月27日まで続きました。

調査の大きな目的は、東面回廊北半部と北面回廊の構造が複廊であるかどうかの解明でした。東面回廊では、礎石の据付痕跡を6ヵ所確認しました。東西に等間隔にならぶ3基の据付痕跡を確認したことから、東面回廊は複廊であったと考えられます。桁行の柱間寸法は、北端部が約3.8m(13尺)、その南は約4.1m(14尺)、梁行は約2.9m(10尺)となります。回廊基壇は版築で丁寧に積土をおこない、造成していることがわかりました。

北面回廊では礎石の据付痕跡を11ヵ所確認しました。北側の遺存状況は良くなく、北側柱筋は根石由来と考えられる小礫の広がりを確認するのみでした。ただ、小礫の広がりは北側柱推定位置でみられることから、複廊であった可能性は高いといえます。柱間寸法は、桁行約4.1m(14尺)、梁行約2.9m(10尺)に復原できます。

また、東面・北面回廊沿いにL字状に溝が掘られていることがわかりました。この溝は回廊造営時につくられ、造営時の雨水処理のため、回廊基壇の高まりと一体的に掘削されたとみられます。回廊造営に関わる重要な知見を得ることができました。

3月3日には現地説明会を開催し、645名の方々に調査成果をご覧いただきました。

(都城発掘調査部 前川 歩)



礎石据付痕跡とL字溝(北西から)

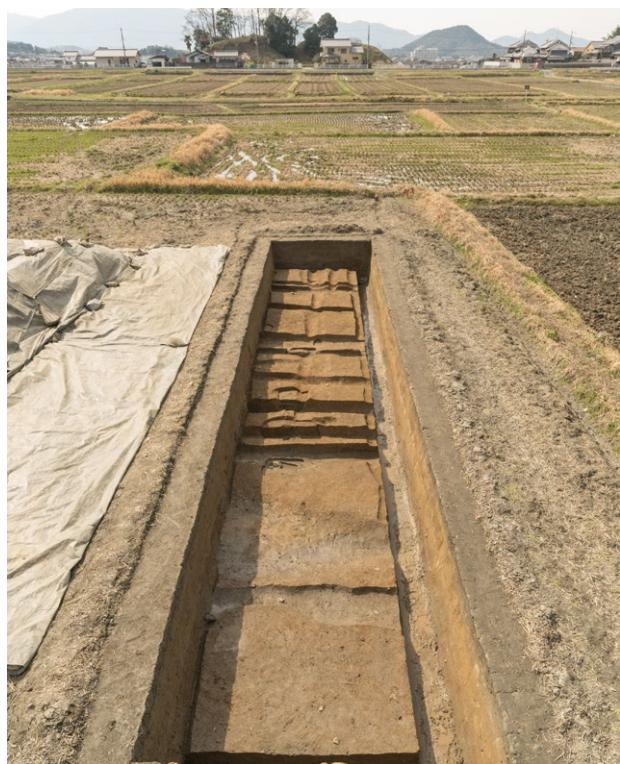
大官大寺南方の調査(飛鳥藤原第196次)

大官大寺は藤原京左京九条四坊・十条四坊中の6町を占め、百濟大寺に起源をもつ官寺です。主要な伽藍の配置や規模はあきらかになっていますが、南門等の堂塔は未確認です。また、主要伽藍から山田道までの南北約450mの地域に関しても、考古学的な調査はほとんど実施されていませんでした。そこで、寺の全容とその南方の様相を解明するため、2017年度から調査を開始しました。

調査は短時間で広範囲の様相を把握することができる地下探査と、実際に地下の詳細な情報を取得することができる試掘調査をあわせておこないました。探査は2018年1・2月に、のべ3日間で約10,000m²実施し、試掘調査は3月6日から23日まで、45m²実施しました。調査区は藤原京左京十二条四坊東北坪に位置し、大官大寺の中軸線上で、かつ東四坊坊間路の東側溝が想定される地点です。

残念ながら道路側溝は検出されませんでしたが、掘立柱建物1棟と掘立柱塀1条等を確認しました。また、調査区の東部では、流路の西岸とみられる、東に向かって下がる旧地形を確認しました。埋立土の中には7世紀後半の土器片が含まれており、その頃にこの旧地形を埋め立てて平坦な地形へと改変していったものと考えられます。

(都城発掘調査部 清野 陽一)



試掘調査区全景(東から)